

社会的組織化のアクチュアリティ 「制度のエスノグラフィ」における日常世界の探求

瀧 則 子*

Actuality of Social Organization: Exploration of the Everyday World through “Institutional Ethnography”

TAKI Noriko*

Abstract

This paper aims to examine Dorothy E. Smith's feminist research strategy, which is called “institutional ethnography.” Institutional ethnography is a research strategy that emerged from Smith's explorations of the problematic of the everyday world. The essential point of Smith's project is a critique of “objectified knowledges.” Institutional ethnography investigates how our everyday life is shaped by the social organization beyond individual scene of everyday life. First, this paper reviews the key points of Smith's “sociology from women's standpoint” and then her understanding of the “everyday world as problematic.” Next, it examines institutional ethnography. In addition, it investigates the procedure of institutional ethnography referring to her description of her own experience as the point d'appui of inquiry. The last section confirms the possibilities of her approach in addressing contemporary society.

1 はじめに

本稿は、カナダのフェミニスト社会学者ドロシー・E・スミス(1926-)を中心に展開されている「制度のエスノグラフィ(institutional ethnography)」(Smith 1987)と呼ばれるフェミニスト調査実践について検討することを目的としている。「制度のエスノグラフィ」は、スミスによって以下のように記述されている。

制度のエスノグラフィのアイデアは、そ

の問いが、「ものごとがどのように作動する(work)のか」「それらは実際にどのように編成される(put together)のか」を明らかにするものであることを強調する。エスノグラフィという概念(notion)は、社会的組織化と社会関係のアクチュアリティに忠実なプロジェクトであることを強調するものである。社会学的言説の概念や理論から開始する調査実践とは対照的に、フェミニスト社会学のこの方法は、アクチュアルな状況において開始し、その状況を組織化するアクチュアル

*名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程国際コミュニケーション専攻

な関係を探求する。(Smith 1987: 147-148)

シュッツによれば、社会学がすべきことは「自明なもの」「あたりまえ」を疑うことである(Schütz 1932=1982: 21)。近年、社会学に限らずディシプリンを越えて、近代に成立した「知」への問い直しが課題となっている。私たちが今日生活する社会は「知識社会」「情報社会」といわれ、知識はまた重大な政治問題にもなっている(Burke 2000=2004: 9)。構築主義的な発想があるていど受容されるようになり、知識は「本質的なもの」「発見されたもの」ではなく、「発明されたもの」「構築されたもの」としばしば記述される。私たちの生きる社会や時代を、知識とのかかわりから明らかにすることが要請されている。ここでいう「知識」とは、科学的知識のみを含むのではなく、日常的知識をも含めたわたしたちの常識を意味する。

スミスが展開する制度のエスノグラフィは、「自明なもの」「常識的知」を対象化しその成り立ちの過程を明らかにすることをめざす試みである。「それが私たちにとってそうであるように、いかにして起こるのか」「私たちがそのなかで活動し経験する世界はいかにして編成されるのか」(Smith 1987: 154)。制度のエスノグラフィは、このような問いに答えるためのひとつの調査実践として提示されている。

次節ではまず、スミスが提唱する「女性の観点からの社会学」の要諦をおさえ、その社会学を実現するための「日常世界をプロブレマティックとして調査する」という思考方法、そしてそこから展開される「制度の

エスノグラフィ」の概要を確認する。その際、彼女の使用するいくつかの概念についてもおさえておく。第 3 節では、具体的な「制度のエスノグラフィ」を参照しながら、その手続きを検討する。さいごに、スミスの「制度のエスノグラフィ」が現代社会において持ちうる有効性について、若干の検討を行う。

「制度のエスノグラフィ」とはなにか

1. 「女性の観点からの社会学 a sociology from women's standpoint」

「制度のエスノグラフィ」は、スミスの提唱する「女性の観点からの社会学」のためのリサーチ・ストラテジーとしてスミスによって提示されているものである。具体的な調査にもとづくスミス自身の論文は少ないが、フェミニズム分野に限らず、スミスの仕事に刺激を受けた多くの研究が活発に展開されている²。「制度のエスノグラフィ」にはいるまえの作業として、「女性の観点からの社会学」の要諦をまずは確認しておきたい。

スミスの「女性の観点からの社会学」は、「名前のない問題」をきっかけとする第二波フェミニズム運動の問題意識を出発点としている³。第二次世界大戦後の北米において、幸せなはずの裕福な専業主婦層に蔓延した憂鬱を、フリーダン(Friedan 1963=1986)が「名前のない問題」としてとりあげ、これをきっかけとして国際的規模における第二波フェミニズム運動が展開された。第二波フェミニズムは、女性の公的な権利をもとめた第一波フェミニズムを経たのち、そのような公的権利が獲得されてもお女性

経験する抑圧の存在を見出し、この「見えない支配」を「家父長制 (patriarchy)」として問題化した。「家父長制」とは何かについてはフェミニズム内部においても様ではないが⁴、スミスにおいては、「家父長制」は一貫して知識の問題としてとらえられている。中立的・非人称的・一般的な顔をして社会に流通する「客観化された知識 (objectified knowledges)」は、支配階級の男性の経験を自明のものとしてつくられた知識であって男性中心の視点を持つにもかかわらず、「普遍的」「客観的」な性質を持つように見るとスミスは言う (Smith 1979=1987: 180-200)。女性が自分の「問題経験」を公的に表現しようとするさい、その経験と、経験を社会的に表現する形態とのあいだに断絶が存在する。なぜなら、スミスによれば、「社会を支配するための装置の一部分として生み出されるイデオロギー形態の構築から女性が排除されてきた」 (Smith 1979=1987: 259-260) ために、女性が依拠し参照する知識は、「普遍的」「客観的」に見えて実は男性中心の知識だからである。スミスはこのように「客観化された知識」に「家父長制」を見出す。「名前のない問題」とは知識の問題であり、「女性の観点からの社会学」は、女性の断絶の経験を入りに、その断絶の経験を成立させる社会関係を明らかにする作業を行うのだとする⁵。

私はこの考察を、こうした私の経験あるいは他の女たちの経験　この断層を取り上げ、それがいかに組織され、決定されているのか、またそれを生み出すのはいかなる社会関係なのかを問うこと

によって進めていく。(Smith 1979=1987: 181)

スミスの社会学は、ひとびとを客体化することなく、ひとびとの日常経験を組織化するようなアクチュアルな社会過程と実践を日常世界の観点から説明し (Smith 1987: 151)、ものごとがひとびとにとってどのようににたちあらわれてくるのはいかにしてかを明らかにしようとする (ibid.: 153)。その分析においてスミスが目指するのは、直接的に経験されるものと、それが社会的に表現される形態の間の断絶である。スミスによればこの断絶は、支配階級の経験を自明とし、支配階級の経験による知識が中立的・非人称的・一般的な「客観化された知識」として流通することにより生じると分析される⁶。

2. プロブレマティックとしての日常世界

上記で概観したように、スミスの社会学の中心的な論点は「客観化された知識」批判である。スミスが次におこなうのは、「女性の観点からの社会学」というプロジェクトを実現するための思考方法の検討である。

スミスの社会学は、日常世界を「プロブレマティック (problematic)」として取り上げようとする (Smith 1979=1987: 247-249)。この主張は、単に「日常生活はプロブレマティック (問題含み、ややこしい、困難) である」ということを意味するのではなく、社会学のプロブレマティック (ありうる研究の地平を生み出す関心・論点・疑問の複合体) として日常生活の世界を扱うことができる、ということの意味する (Grahame 1998: 348)。

「日常生活をプロブレマティックとして扱う」とはどのようなことか。しばらくスミスの記述を追ってみよう。スミスは「犬の散歩」の例をあげて説明している (Smith 1987: 154-156)。朝、彼女が犬を散歩させるとき、私たちが慣習 (conventions) と呼ぶようなものが観察できるという。飼い主である彼女は、犬が走り回ったりおしっこをしたりする場所に注意しながら歩く。彼女が住む一帯は、一戸建て住宅や賃貸住宅、クラブハウスなどが混在している。一戸建て住宅の住人は家の前の芝や花壇をよく手入れしているが、逆に賃貸住宅の住人はあまり手入れしない傾向がある。したがって犬の歩く場所についても、一戸建て住宅の芝生の前では特に注意するといった行動をとり、賃貸住宅や独身者の住宅、クラブハウスなどの前では多少不用意になる。このようなふるまいの選択は、社会学では慣例上、「規範」の問題 飼い主と隣人らに共通に保持されている規範に導かれるものとして説明される。しかし、これだけでは重要なものが見えなくなるとスミスはいう。

それは、犬を散歩させるという局所的な一連の行為が、社会関係 (social relations) にどのように接合されるかという問題である (Smith 1987: 155)。スミスのいう社会関係とは、二人以上の個人がかかわる一連の社会的行為であり、かならずしも対面状況にあって、お互いが知り合いであるような関係に限定されるものではない (ibid.)。さまざまなタイプの住宅の存在は、地方条例や都市計画法を含むさまざまなレベルで国家の組織化に依存している。普通の日常的なシーンひとつひとつが、個別で局所的

な状況をより一般化された社会関係の複合体に結びつけるような組織化を含むのである (Smith 1987: 156)。日常世界をプロブレマティックにするということは、一般化の可能性のまったくない局所的な設定を個別に記述するというのではない (ibid.)。そうではなくて、日常世界を決定している制度的関係がどのように組織化されるかを明らかにすることを目指している。

スミスのアプローチは、既存の社会学への批判を含むが、「客観化された知識」への批判として展開されている。彼女の「女性のための社会学」では、「女性の経験のアクチュアリティから開始する」(Smith 1992: 88) ことが主張されていた。スミスによれば、社会学的知識の言説は「社会のアクチュアリティを表現したものではなく」、「伝統的な社会学の方法は、社会過程を客体化し、アクティブな主体の存在を、その表象から消去する」(Smith 1987: 152)。例えば、非行・貧困・失業・精神病などといった概念は、個人の活動を客観化された形態のなかに出現させ、関係する制度の規範や手続きの関係で活動を定義してしまうのであり、そのような概念枠組みをもってはじめることは、生活世界を客体化するものだという。

スミスの博士後期課程における指導教授であったアーヴィング・ゴフマンのドラマトゥルギー的メタファーについて、スミスは「日常世界を社会学にとって目に見えるものにした」(Campbell 2003: 5) と評価する一方で、「研究領域が内的一貫性を持ちかつ記述的に理解可能なものとして取り扱われるよう組織する一組のカテゴリーをつくりだしてしまった」(Smith 1979=1987: 248-249) と批判する。また、エスノメソド

ロジストのボルナーやジンマーマンに対しても、彼らのやり方は生活世界を社会学的探求の対象とみなし、それを孤立させてしまうのだという (ibid.)。ゴフマンやボルナー、ジンマーマンのように「現象としての生活世界に焦点をあてた戦略」は、「社会的に組織化された文脈の中に実際に埋め込まれているそのありようを方法論的に消去してしまう」(Smith 1979=1987: 248-249) としてしりぞける。

スミスは、既存の社会学のカテゴリーを使うかわりに、アクチュアルに生きられ進行中である生活世界から問いを開始し、そのような世界のありかたを明らかにするような概念化を行うことを提案する (Grahame 1998: 350)。「プロブレマティーク」は、概念や理論の適用以前にそこにあるものであり、ものごとがどのように組織化されるのかという問いの形をとる。そして、このような組織化は、局所的な状況の「外側」で生じ、その「内部」では部分的にしち理解することができないような社会関係によって生み出されるのであり、「生活世界はその中にいたのでは見えない社会関係によって組織化されているという見方こそ、この方法の本質である」(Smith 1979=1987: 246) とスミスは主張する。

3. 「制度のエスノグラフィ」の概要

次に、上記のような視点からなされるスミスのリサーチ実践とはどのようなものであるのか、「制度のエスノグラフィ」の輪郭をとらえてみよう。

「制度のエスノグラフィ」とは、日常世界のプロブレマティークをとりあつかうためのアプローチであり、制度化された言説の

枠組みにとらわれることなく、日常世界の社会的組織化を記述することを試みる。「エスノグラフィ」という言葉の定義は、スミス独自の使い方となっている。スミスにおいては、「エスノグラフィ」とは、観察やインタビューの方法に限定するのではなく、「『それ』が実際にはどのようなものであるのか、また『それ』が実際にどうはたらくのかを調査し解明することへのコミットメント」(Smith 1987: 160) なのである。通常、「エスノグラフィ」という用語は、人工的な設定の実験と対置されるような、研究対象となるひとびとや集団を「自然な」状態で観察するフィールド研究を意味し、日常生活において集団の成員ができごとに対して付与する意味を、「異質なものalien」として抽出するような手法である (Grahame 1998: 352)。

これに対し、スミスのいう「エスノグラフィ」とは、ある特定のひとやひとびとの経験を、「入り口」として 局所的な設定を形成しながらもその外に起源を持つような社会的組織化の形態へのエントリーポイントとして あつかうことで、社会的組織化の探求を行おうとするものである (ibid.)。スミスのアプローチにとっては、個別のケースは単なるひとつの「ケース」ではなく、より大きな社会的過程への入り口であり、「日常世界のプロブレマティークは、広く社会全体における分業を組織化する、一般化され抽象化された社会関係をもって、個別の経験の接合点で立ち現れる」(Smith 1987: 157)。このアプローチにおいては、具体的な経験は、日常世界の局所的な組織化が支配の関係にどのように接合されているのかを解明するためのキーとして

扱われる (Grahame 1998: 352)。スミスにとって「エスノグラフィ」という用語は、「抽象の中で考えるのではなく、ワーキングの日常世界がそこで組織化される特定のひとびとの『入り口』から社会関係の複合体を探求し、記述し、分析することに私たちをコミットさせるために導入される」(Smith 1987: 160) のであり、「社会的組織化と社会関係のアクチュアリティに忠実なプロジェクトを強調する」(Smith 1987: 147) のだと述べる⁸。

次に、「制度 (institution)」という用語の定義についてみてみよう。スミスの「女性の観点からの社会学」においては、女性が経験する見えない支配 = 「家父長制」とは、女性の経験が、「普遍的」「客観的」「一般的」にみえる「客観化された知識」によって記述されたり解釈されたりすることから生じるのだと論じられる (瀧 2004b: 210-211)。このアクチュアルで局所的な経験を一般化するものとしての「客観化された知識」が作用する過程を、「制度的過程 (institutional processes)」とよび、制度的過程は、現代社会の組織化 (organize) ・調整 (coordinate) ・統制 (regulate) ・支配 (guide) ・管理 (control) を行うのだという (Smith 1987: 152)。そして、日常世界が制度的過程によってどのように形作られ決定されているのかをあきらかにすることが出発点であるとす。スミスにおいては、「制度」とは個別の社会組織を意味しているのではなく、個別の組織のまわりに組織化された、支配の装置の一部を形成する関係の複合体として定義されている (Smith 1987: 160)。社会学概念としての「制度」は、通常「確定した行動様式」「習得され慣習化した行動様

式」といった定義が与えられているが (江原2001: 186)、スミスの「制度のエスノグラフィ」においては、「支配の装置 (apparatus of ruling)」⁹ (Smith 1987: 147) を形作るものとして把握されていることが特徴的である。

以上より、「制度のエスノグラフィ」は、制度化によって不可視となっている日常世界の社会的組織化のアクチュアリティを可視化する手続きであるといえる。

スミスは、制度のエスノグラフィを構成する3つの主要な手続きを次のようにまとめている (Smith 1987: 166-167)。

ワーク (work)¹⁰の組織化を説明可能 (accountable) にするのに用いられるイデオロギーの手続きの分析：制度的イデオロギーは、制度に適合する局面だけを、適用されるカテゴリーと概念の操作により制度的秩序の中で説明可能にし、その結果ワークの多くの部分は見えなくなる

広義のワークに焦点をあてる：ひとびとが日常世界の産出にアクチュアルに関係するその仕方を扱えるようなワーク概念を採用する

社会関係：局所的なワークの組織化が人間活動の多元的な場を結合させるようなより広い社会関係のセットの一部として作用する仕方をみる

スミスのこのアプローチは、既存の社会学への挑戦として展開されている。「制度のエスノグラフィ」が満たすべき要件を、スミスの批判点に着目してここで整理しておく。

第一のポイントは、制度と専門的言説が、

日常世界において生活し活動するひとびとの観点をどのようにして排除するかという分析を通して社会学批判を展開している点である。ローカルで個別なひとびとの活動が、「客観化された知識」を媒介として客観化された形態の中にあられてしまわないような社会学でなくてはならない。

また、彼女自身が述べるように、彼女の社会学はエスノメソドロロジー¹¹に多くを負っているが、3つの点において異なるという (Smith 1990: 9)。(1)「内部者 (insider)」の視点で探求すること、(2)その目的は普遍化する科学ではなく、私たちが生活する社会のアクチュアリティの探求を行うこと、(3)ミクロ社会的なものの分析を通して、社会を組織化する拡張された/マクロな関係への接近を探求することの3点においてである (Smith 1990: 9-10)。したがって、第二のポイントとして、内部者insiderの視点で探求を行うこと、第三として社会のアクチュアルな経験を開始点として、その経験がうめこまれているマクロな社会関係の分析を行うこと、とまとめておきたい。

4. 「制度のエスノグラフィ」の理論的基盤

具体的なエスノグラフィの検討に先立ち、「日常世界をプロブレマティックとして探求する」というスミスの発想の基盤となった理論的背景について簡単にみておきたい。

1926年にイギリスで生まれたスミスは、1963年にカリフォルニア州バークレーで社会学Ph.Dを取得している (瀧2004a: 115)。1940 - 50年代のアメリカ社会学においては、ハーバード学派とコロンビア学派が優勢であり、パーソンズによる機能主義社会学および数量的、統計的調査研究が中心であっ

た (船津2001: 8)。スミスが彼女の博士後期課程にはじまるバークレーでの生活を送った期間 (1955 - 1966)、彼女が在籍したカリフォルニア大学バークレー校は、ミクロな社会学が展開された数少ない大学のひとつであった。1960年代には、ブルーマーらのシンボリック相互作用論、ガーフィングルのエスノメソドロロジー、シュッツの現象学的社会学が表舞台に登場し、「解釈パラダイム」「意味の社会学」とよばれ、いずれも機能主義の社会中心主義を批判した (船津2001: 9)。それらは、主観・意味・シンボルの世界を重視し、行為者の立場に立つて行為者の内面を解明し、そこから人間の主体性と動的社会のあり方を具体的に明らかにしようとした (ibid.)。彼女が社会学研究者としての生活を開始した時期、アメリカ社会学はこのような状況であった。

社会学の専門的言説の世界から始めるのではなく、ひとびとの経験のアクチュアリティから開始しようというスミスのアプローチが、このような「意味の社会学」といわれる研究から強い影響を受けていることは間違いないだろう。スミスの著作においてはG.H.ミード、メルロ＝ポンティ、A.シュッツ、指導教授であったゴフマン、ガーフィングル、そしてマルクスについてしばしば言及されているが、本稿ではとくに、シュッツとエスノメソドロロジーについて触れておきたい。

スミスは、「客観化された知識」を問題にし、イデオロギー構造を変革する社会学を発展させるにあたり重要なのは、(女性の)経験と主観性から出発することだという (Smith 1979=1987: 196)。「経験と主観性から出発する」方法とはどのようなアプロー

チなのか。スミスは、意識の組織化に関するシュッツの叙述を援用しながら、「至高の現実 (paramount reality)」における意識の組織化のありよう、その身体が占めている位置、実際の「ここ」を座標体系のゼロ点とするような意識を出発点とするような方法であると述べる (Smith 1979=1987: 213-224)。彼女の「問いの出発点」の発想は、彼女自身が引用していることからわかるように、シュッツにおける「至高の現実」に多くを負っていると思われる。

そのような意識のありように対して、彼女が疑問に付すのは、「『私たち』という言葉が普遍的性格を持つようになり、前、後などの範疇が、主体がこの世に占める身体的位置によって組織化されるのでなく、むしろ言説の時間的・『空間的』構造によって組織化される」(Smith 1979=1987: 215) ような意識の組織化のありようである。そのような特徴を持つ限定的意味領域として、シュッツによる「科学的態度」の限定的意味領域をあげる (Smith 1979=1987: 215)。社会学者は、科学的態度を採用することにより、「アルキメデスの点」、つまり社会のいかなる特定の位置ともかかわりなく存在する点との関連で作り上げられた客観性を実践しようと試みてきたが、どのような研究者も特定の社会関係の中に埋め込まれ位置づけられた存在であり、個別的な関与と関心の排除は「わざとらしく、不自然で、間違っている」(Smith 1979=1987: 216) という。このような科学的態度による実践が、局所的なものを脱局所的なものに変換し、客観性や中立性を組み立てるのだと批判する。

次にエスノメソドロジーについてみてお

こう。スミスは自身をエスノメソドロジストと明確に自称してはいないが、しばしばそのように位置づけられる¹²。邦訳されているスミスの論文のひとつである「Kは精神病だ K is mentally ill」(Smith 1978=1987) では、ある人を「精神病である」とひとひとがカテゴリー化するようになる過程のエスノメソドロジー的解剖を行っている。その著作においてしばしば言明されるように、その探求の視点はエスノメソドロジーにおけるものと近似している。

この内部者の観点 (insider's standpoint) は、(中略) アクチュアルな協働活動、ものごとをそのようにあらしめる進行中の共秩序化の内部から つまり社会の内部から から取り組むための視点である。実践 (practices) および協働 (coordination) は、アクチュアルな過程である。実践・協働は、いま行われ、達成される、あるいは今まさになされつつあり、達成されつつある。(私の) 問いの前提はエスノメソドロジーに近いものである。(Smith 1990: 9)

スミスの「制度のエスノグラフィ」は、以上のような背景および理論的基盤に大きな影響を受けながらかたちづくられてきたのである。

経験からマクロな社会関係へ：手続きの検討

1. 「シングル・ペアレント」の経験の考察

日常世界をプロブレマティックにする問いの方法としての「制度のエスノグラフィ」を例証するため、スミスは彼女自身の「シ

シングル・ペアレント」の経験から、制度的言説と自身の経験との断絶点を検討している (Smith 1987: 167-175)。ここでは、彼女自身の経験が問いの支点 (point d'appui) になっている。

彼女は実際数年の間「シングル・ペアレント」であった。多くの家庭では通常、両親がそろっている状況であるのに比較すれば、彼女の場合は一人で子育てをしていたという点で、事実「シングル・ペアレント」であった。にもかかわらず、「シングル・ペアレントである (being a single parent)」というアクチュアルな経験は彼女の記憶のなかにはただの一度もないという (Smith 1987: 168)。一方、「シングル・ペアレント」という概念は、ある制度的な文脈、たとえば学校教育における彼女の子どものリーディング能力習得という文脈では効力を発生する。つまり、自身の経験を説明するものではないが、子どものリーディング能力の問題が「シングル・ペアレント」という概念に関して説明可能になると、彼女が行うマザリング・ワークが学校教育の過程との関連で「組織化」され解釈されるようになる (Smith 1987: 168)。「シングル・ペアレント」という概念は、子どもの問題と家庭状況との関係を分析するための方法を学校職員に提供するだけではない。この概念は、「欠陥のある」家庭状況と学校における子どもの状況との関係をめぐって、彼女が行うマザリング実践を、彼女自らが分析するように促す (Smith 1987: 168)。彼女が経験する断絶 (disjuncture) とは、自身の経験と、教育に関わる専門的言説の使用とのあいだの断絶である。

さらにスミスによれば、教育にかかわる

言説においては、マザリングのワーク過程が説明されていない (Smith 1987: 168-170)。たとえば、カナダ・オンタリオ州の Ministry of Education¹³は、子どものリーディングスキルを伸ばすための親へのアドバイス ちらかすことを気にしないでいいような場所を与えましょう、芸術作品を子どもと鑑賞しましょう、手作りのパペットを使い、子どもにパペットショーをさせて、親は聴衆になりましょう等をパンフレットなどにのせているが、これらのアドバイスはどれも十分に広い住宅や設備、親の知的レベルや学歴、母親が常に子どもと一緒にいられる状況であること (仕事を持っていないなど) が前提となっているのである (Smith 1987: 168-169)。つまり、よい教育を実現するためには、経済的余裕・高い学歴・さらに母親が子どものために十分な時間を持つことが暗黙に要請されているのである。さらに、スミスは、マザリング・ワークのありかたは、教室における教師の仕事の大きさを大きく左右することを指摘する。スミスは、絵の具を使って絵を描く授業の例をあげて説明している (Smith 1987: 170)。絵筆についての絵の具と違う色のびんに筆をつっこむと色がまざってめちゃくちゃになってしまうので、同じ色のびんに筆を戻さなければならないというルールを、子どもが学校で絵の具を使う前にすでに家庭で教えていたら、教師の仕事はずっと楽になる。つまり、教師の仕事というのは、そのワークの条件としての家庭におけるマザリングの結果に大きく影響されるのだ (ibid.)。

日常世界をつくりだすワークの過程から次にスミスが向かうのは、そのワークを形

作る社会関係の考察である。日常世界におけるワークの経験を検討するという手続きを経ることで、教室における教師のワークと家庭におけるマザリング・ワークという二つのワークを結び付ける社会関係を発見し、さらにその関係を階級と国家というより拡張された社会関係のなかに位置づけることが可能になる (Smith 1987: 175)。既に見たように、「よいマザリング」言説は、中流階級以上の経済的条件を前提としているため、マザリングと学校教育の関係は階級によって異なってくる。労働者階級の母親は、雇用労働者として働く確率が高いゆえに、子どものために使える時間が少なくなりやすい。また、中流階級の標準的マザリング実践にはあまり通じていないことが考えられる。スミスによれば、マザリングと学校教育のワーク過程の接合は「自然なもの」でも「偶然」でもない。階級に特徴的なマザリング実践が、教室や学校におけるワークの組織化において決定的な役割を演じることにより、結果的に中流階級の再生産が行われるのだとする。

このような分析により、制度的過程のパースペクティブから 学校との関係からみると、「シングル・ペアレント」は、教室における教師の仕事の組織化の基盤となるマザリング実践を適切に行えない「欠陥家族」とみなされうるのである。つまり、「シングル・ペアレント」という用語は、このような学校や教室の社会関係という広い文脈で作用するものとして理解する必要があるのである。「シングル・ペアレント」という用語が適用されると、その「欠陥」は母親がかかわるアクチュアルな実践とは関係なく存在するようにみなされてしまうの

だ。女性がアクチュアルに行うことはみえなくなるのに、教室で起こることは社会の支配の関係と連動する概念装置の内部で説明可能になってしまう。

本節では、スミス自身が記述した「制度のエスノグラフィ」を追った。スミスの説明はまず自身の親としての個人的な経験から始まるが、最後は学校教育と教室の再生産という、より広い社会関係の考察へと展開されるという手順が確認された。

2. 要件の検討

では次に、の3.であげておいた三つの要件に基づいて検討してみよう。第一のポイントは、制度と専門的言説がどのようにして日常世界において生活し活動するひとびとの観点を排除するかという分析を行うこと、第二に、「内部者」の視点で探求を行うこと、第三として社会のアクチュアルな経験を開始点として、その経験がうめこまれているマクロな社会関係の分析を行うこと、この3点であった。

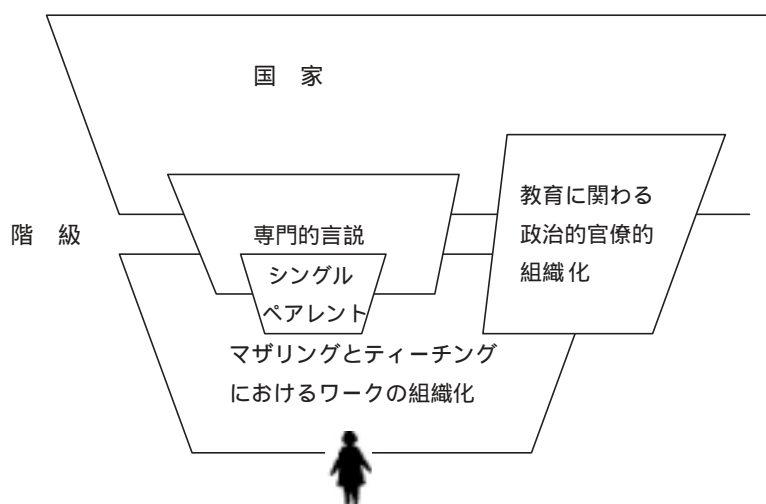
まず第一番目の点、制度と専門的言説がどのようにして日常世界において生活し活動するひとびとの観点を排除するかという分析について。彼女は自身を「シングル・ペアレント」として自己カテゴリー化していない(彼女自身の観点)のだが、マザリングと教育のワークの組織化と専門的言説は「シングル・ペアレント」というカテゴリーを析出し、そのカテゴリーを彼女に適用する(学校組織の観点)。そしてスミスによれば、この過程は通常不可視になっている (Smith 1987: 162)。

次に、議論を見やすくするため、三番目について先に論じたい。スミスは、この

「シングル・ペアレント」の経験から行う探求を、図1のように示している。「シングル・ペアレント」とカテゴライズされるという経験をする「彼女」は、図のような社会関係に「埋め込まれて」いることが明らか

になる。社会におけるアクチュアルな彼女の経験を開始点として、さまざまなレベルのマクロな社会関係にどのように埋め込まれているかが分析されている。

図1 制度のエスノグラフィのデザイン (Smith 1987: 171)



図中のシルエットの女性のマザリング経験は、マザリングとティーチングにおけるワークの組織化のなかに埋め込まれているが、そのワークの組織化は、国家と結びついた専門的言説や政治的官僚的組織化と関連しあっている。図に示されたような関係のなかで、女性のアクチュアルな経験とは独立に、「シングル・ペアレント」というカテゴリーが浮かび上がり、適用される。そして、マザリングをめぐる組織化のあり方は、「教育過程を通して階級を再生産する社会関係を支え、維持する」(Smith 1987: 174)と分析されている。

最後に、二番目の点、内部者の視点で探求を行うことについて。まず、このアプローチにおける「探求者」は誰か。スミスによ

れば、「制度のエスノグラフィ」の問いは、「社会学者とその経験の社会的マトリックスを理解したい人との共同の作業として考えなければならない」(Smith 1987: 154)という。なぜなら、日常世界に生活する私たちはそれぞれが「日常世界のエキスパートな実践者であり、それがどのように編成され、日常的にどのように達成されているのかについてもっともよく知りうるから」(ibid.)では、専門的スキルをもつ社会学者の仕事はなにか。私たちの経験をそのように経験させる社会的組織化は「それ自身の範囲、個人の日常的活動の範囲のなかでは、部分的にしか発見され得ない」(ibid.)のであり、「そのローカルな組織化は、ナショナルおよびインタナショナルな社会的・経済的・政治

的過程に、ローカルな生活とローカルな状況を織り込むような複雑な分業の社会関係によって決定される」(ibid.)。日常世界の内部においては把握できない社会関係をあきらかにするのが、社会学者の役割だとする。したがって、「内部者の視点で探求する」とは、共同研究者としての社会学者が、もう一方の共同研究者であるエキスパート実践者であり経験するそのひとの視点をもって、その人をめぐる世界の組織化を問うというスタンスを示していると思われる。スミスの問いのねらいは、普遍化された「アルキメデスの点」から「ひとびとのふるまいを説明することではなく」、「ひとびとに対して、ひとびとの生活と活動を形作る社会的なもの / 社会を説明すること」(Smith 1999: 98)なのである。

しかし、調査のプロセスにおいて、「内部者の」視点を常に持つことは困難であったようだ。「標準的な『外部者』の観点にうっかり滑り落ちるのはまったく容易」(Smith 1987: 185)であったと述べている。スミスは、アリソン・グリフィスと共同で、子どもの学校教育との関連で母親が行うワークについて調査を行っているが¹⁴、その調査過程において、「母親の視点」から始めた問いのなかに、「学校組織の視点」を知らず知らず輸入してしまっていた「失敗」について言及されている(Smith 1987: 187)。スミスとグリフィスは、「インタビューを受けた女性の観点を終始維持する方法」(Smith 1987: 182)を注意深く検討している。彼女らは、階層的に異なる二つの地域にある小学校から一校ずつ選び、各校からそれぞれ6人ずつの母親にインタビューを行い、マザリング実践が、二つの学校の教師のワー

ク実践とどのように関係するかを明らかにしようとした(Smith 1987: 186)。スミスがめざす社会学は、「従来の社会学のようにひとびとのふるまいを説明することではなく、ひとびとに対して社会的なもの、社会を説明すること」(Smith 1999: 96)であり、この調査の目的は「学校の制度的実践がどのようにして母親としての女性の経験を組織化するのかを探求する」(Smith 1987: 187)ことであった。にもかかわらず、彼女らはいつのまにか「少数のサンプルからより大きな母集団の特徴への一般化」(ibid.)を考えてしまっていたという。彼女らの調査活動において「内部者」の視点を確保するように常に注意が払われていることは確認できるが、「内部者」の視点を常に確保するような装置が、手続き自体に備わっているわけではないといえるだろう。

さらに困難なのは、「内部者」とはどう定義されるのか、内部 / 外部の境界線はどこにひけるのかという社会的境界の問題である。例えば「女性(women)」という集合も、人種・階級、性的志向などの社会的カテゴリーによって分けられるのであり、「内部者」という立場の前提となるような集団や集合体の内部は均質なものではない(Griffith 1998: 363)。また、内部 / 外部を分ける社会的境界もまた流動的であり固定されているものではない(Griffith 1998: 368-369)¹⁵。

手続きの形式において必ずしも「内部者」の視点が確保できるとは限らないこと、「内部者とは誰なのか」という問いに必ずしも明快な答えが用意されているとは言えないことから、第二の点に関してはさらなる検討および手続きの洗練が必要とされているといえよう。

おわりに

本稿では、制度的過程によって見えなくなっている社会的組織化を、社会関係にうめこまれたひとびとの経験を入り口に、可視化し説明可能にしようとする「制度のエスノグラフィ」という調査実践について検討をおこなった。「制度のエスノグラフィ」は、スミスによる「女性の観点からの社会学」のリサーチ・ストラテジーとして提案されているものであった。「女性の観点からの社会学」が焦点としているのは、「普遍的」「客観的」に見えて実は男性中心な性格を持つ「客観化された知識」であり、女性が経験する見えない支配＝「家父長制」とは、女性の経験が「客観化された知識」によって記述・解釈されることから生じると論じられている（瀧 2004b: 210-211）。「制度のエスノグラフィ」とは、この「客観化された知識」が作用する過程を、経験する女性の観点からあきらかにしようとする試みであった。本論では、スミスの提示する理論的要件を三点に整理し、それにもとづいて実際のエスノグラフィを検討する作業をおこなった。ふたつめの要件としてあげた、「内部者の視点を維持すること」については、調査の過程でそれが困難であったことがスミスによって言及され、さらに、内部／外部の境界の問題も指摘され、さらなる検討および手続きの洗練が求められることがわかった。スミス自身、このストラテジーを *the feminist research strategy* ではなく「ひとつのフェミニストリサーチ戦略 *a feminist research strategy*」と提示していることからわかるように、スミスが提示した「制度のエスノグラフィ」は、「オーソドックスな方法を確

立しようとするものではなく」（Smith 1987: 148）「ひとびとに社会的なものを説明する」ことのできる社会学を実現するひとつの提案であり、今後スミスが提示した方法をさらに洗練していくことが必要であろう。

冒頭で述べたように、現代社会においては、私たちの「知識」のありかたを問い直すのみならず、その成り立ちの過程を明らかにする作業が必要とされている。なぜなら、スミスによれば、私たちの知識とは「アクチュアルな活動の進行中の協働として探求し、常に生ぜしめられ、決して完結することのないものとして」（Smith 1990: 159）とらえられるものであり、固定したなものかではなく、私たちの日常的相互行為のなかで繰り返し達成されるものだからである。グローバル化が進展する社会においては、文脈から切り離され一般化された普遍的知識がますます偏在し、私たちの身体や生命・環境を脅かしている現状への批判も展開されている¹⁶。しかし一方では、そのような普遍的知識がどのようにして偏在するようになり、どのようにして私たちの日常世界を形作り支配しているのかといった、ミクロとマクロをつなぐ具体的な過程の探求は十分になされているとはいえない。スミスのアプローチは、日常世界における具体的でミクロな相互行為場面と、より拡張されたマクロな社会関係のあいだのプロセスを分析しようとするものであり、近年の言説分析におけるふたつの流れ（広く流布されている知の脱構築と具体的文脈的な言語の諸遂行の研究）をつなぐ分析を行っている点で評価されている¹⁷。スミスの展開する社会学がグローバル化した社会に対し

て持つ可能性がここに見出せるのではないだろうか。

注

- 1 Smith (1987) 所収の論文 Institutional Ethnographyのほかにスミス自身による論文としては、同じくSmith (1987) 所収のResearching the Everyday World as Problematicがある。
- 2 Grahame (2003), Griffith (1998), Hak (1998), McCoy (1998) 等
- 3 Smith (1992) 参照。
- 4 家父長制について江原 (1992a, 1992b)、瀬地山 (2001)、上野 (1990) 参照。
- 5 「女性の観点からの社会学」について詳しくは Smith (1979=1987:179-270)、瀧 (2004a, 2004b) も参照。
- 6 アクチュアルな実践と「客観化された知識」のあいだの関係については、Smith (1990)、瀧 (2004b)。
- 7 ゴフマンは、最終的にスミスの博士論文の審査には加わっていない。
- 8 イギリスの社会調査論家ハマーズレーによれば、エスノグラフィは方法の点からみると次のような特徴を持つ調査法だという。(1)人びとの行動は、実験といったような調査者によって作り出される条件のもとで、というよりはむしろ日常の脈絡の中で研究される。(2)データは幅広い源泉から収集されるが、観察もしくはインフォーマルな会話は通例、主要なものである。(3)データ収集へのアプローチは、最初から準備された詳細な計画を遂行するということでもなく、また人びとの話や行動を解釈するために用いられるカテゴリーがすべて事前に与えられていたり、あるいは固定されているようなこともないという意味で、「構造化されていない」。このことは調査が体系的でないということではない。ただ最初からデータが限りなく生

の形で、対象範囲も可能なかぎり広範に収集されるということなのである。(4)焦点は通例少数のケースであり、おそらく比較的小規模なあるひとつの舞台背景であったり、一グループの人びとである。実際、生活史調査では焦点は一人の個人の場合さえある。(5)データの分析は人間の行為の意味や機能の解釈について行われ、主に逐語的記述や説明の形をとる。そこでは、たいていの場合、数量的、統計的分析は補助的な役割である。(Hammersley 1998: 1-9) ハマーズレーによるこれらの特徴は、1920年代から1930年代の時期に書かれたシカゴ・モノグラフに一致しているという(中野2003: 26-27)。スミスがシカゴ社会学から多くを学んでいたことも考え合わせれば、方法的にはまさに「エスノグラフィ」そのものといえる。

- 9 「支配の装置」は「社会に対する組織化と統制の装置」(Smith 1989=1987: 189) と言い換えられている。スミスのいう「支配」とは、「背後からの理念操作モデル、つまり支配エリートが無心のひとびとをあざむくために意識的に悪意を持って構想し、唱導する理念としてのイデオロギーというモデル」(Smith 1989=1987: 192-193) によって把握されるものではない。支配的位置にいるひとびとは「支配構造へ参画しているがゆえに、世界をある特定の方法で認識する」(Smith 1989=1987: 193) が、その思考形態が自明とされてさまざまな社会的組織化がなされることにより、支配階級外部のひとびとの世界観を規定してしまうような事態として把握されている。
- 10 スミスにおける「ワーク(work)」とは、「なんらかの労力を要する、ひとびとが意図を持って行い、かつ後天的な能力を必要とするような、ひとびとによる実践」(Smith 1987: 165) と定義されている。家事・育児を含む「アンペイド・ワーク」と「ペイド・ワーク」の二項対立的枠組みを適用

- せず、むしろこの枠組みを疑問に付す。「活動」と訳すことも考えられるが、本稿では「ワーク」という言葉を採用した。
- 11 エスノメソドロジー自体、今日まで多様な展開が示されており、エスノメソドロジーの定義およびスミスによる批判はさらなる検討が必要だが、その点に関しては稿をあらためて論じたい。なお、エスノメソドロジーの展開については西原（2003：155-165）に詳しい。
- 12 ガーフィンケル他（1987）、皆川（1992）、吉野（1997）参照。
- 13 カナダの連邦政府には教育を管轄する中央官庁は存在しない。教育に関するすべての権限は州政府に委ねられており、州の教育法に基づいて州の Ministry/Department of Education が担当する。（http://www.jasso.go.jp/study_a/oversea_info_28.html 2005年5月29日参照）
- 14 Researching the Everyday World as Problematic in Smith（1987）
- 15 スミスは「女性が均質である」としているわけでは必ずしもない。そうではなくてスミスが言いたいのは、私たちは誰もが時間と空間の中に位置づけられた存在であり、社会的世界の知識もまた時間と空間に位置づけられ、個別の場所にいる個別のひとつひとつによって構築されるということである（Griffith 1998: 369）。「社会的に構築された世界を知る唯一の方法は、内部から（from within）知ること」（Smith 1990b: 22）であり、「決して外側に立つことはできない」（ibid.）のである。
- 16 嘉田（1995）、小松（2004）など
- 17 江原2001: 26-61
- して商品化したか』新曜社、2004年）
- Campbell, Marie . 2003 . “Dorothy Smith and Knowing the World We Live In.” *Journal of Sociology & Social Welfare* 30 Issue 1 : 3 -22
- 江原由美子 . 1992a . 「新しい社会理論としてのフェミニズム試論（一）」『情況』6月号、情況出版。
- . 1992b . 「新しい社会理論としてのフェミニズム試論（二）」『情況』9月号、情況出版。
- . 2001 . 『ジェンダー秩序』勁草書房。
- Friedan, Betty . 1963 . *The Feminine Mystique* . New York: Norton（三浦富美子訳『新しい女性の創造』大和書房、1986年）
- 船津衛 . 2001 . 「アメリカ社会学の動向」船津編『アメリカ社会学の潮流』恒星社厚生閣
- ガーフィンケル他 = 山田富秋・好井裕明・山崎敬一（編訳）. 1987 . 『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』せりか書房
- Grahame , Kamini Maraj . 2003 . “ ‘For the Family’: Asian Immigrant Women’s Triple Day.” *Journal of Sociology & Social Welfare* 30（1）：65-90.
- Grahame , Peter R . 1998 . “Ethnography, Institutions, and the Problematic of the Everyday World.” *Human Studies* 21 : 347-360
- Griffith , Alison I . 1998 . “Insider / Outsider: Epistemological Privilege and Mothering Work.” *Human Studies* 21 : 361-376.
- Hak , Tony . 1998 . “ ‘There Are Clear Delusions.’ The Production of a Factual Account.” *Human Studies* 21（4）：419-436.
- Hammersley , Martyn . 1998 . *Reading Ethnographic Research*, 2nd ed., Longman.
- 嘉田由紀子 . 1995 . 『生活世界の環境学：琵琶湖からのメッセージ』農山漁村文化協会
- 小松美彦 . 2004 . 『自己決定権は幻想である』洋泉社

参考文献

Burke, Peter . 2000 . *A social history of knowledge : from Gutenberg to Diderot* . PolityPress（井山弘幸・城戸淳訳『知識の社会史：知と情報はいかに

社会的組織化のアクチュアリティ

- McCoy, Liza . 1998 . "Producing 'What the Deans Know': Cost Accounting and the Restructuring of Post-Secondary Education." *Human Studies* 21 : 395-418
- 皆川満寿美 . 1992 . 「エスノメソドロジーとマテリアリズムのあいだ：フェミニストD. スミスの場合」『現代社会理論研究』2 : 11-22.
- 中野正大 . 2003 . 「シカゴ学派社会学の伝統」中野正大・宝月誠（編）『シカゴ学派の社会学』世界思想社.
- 西原和久 . 2003 . 『自己と社会』新泉社.
- Schütz, Alfred . 1932 . *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Springer. (佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社, 1982年)
- 瀬地山角 . 2000 . 『東アジアの家父長制：ジェンダーの比較社会学』勁草書房.
- Smith, Dorothy E . 1978 . K is Mentally Ill: The Anatomy of A Factual Account . *Sociology*, 12 (1) : 230-253 (山田富秋訳「Kは精神病だ：事実報告のアナトミー」山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳『エスノメソドロジー：社会学的思考の解体』せりか書房, 1987年)
- . 1979 . "A Sociology for Women." Julia Sherman and Evelyn Beck eds., *The Prism of Sex*, Madison: University of Wisconsin Press , 135-87. (田中和子編訳『性のプリズム：解放された知を求めて』勁草書房, 1987年)
- . 1987 . *Everyday World As Problematic: A Feminist Sociology*. Northeastern University Press.
- . 1990 . *Texts, Facts and Femininity: Exploring the Relations of Ruling*, London & New York: Routledge.
- . 1992 . "Sociology from Women's Experience: A Reaffirmation." *Sociological Theory* 10 (1) : 88-89.
- . 1999 , *Writing the Social*, University of Toronto Press
- 瀧則子 . 2004a . 「『女性の経験』をめぐって：ドロシー・E・スミスにおける『問いの出発点』の検討」『ククロス：国際コミュニケーション論集』1 : 115-131.
- . 2004b . 「『知る実践』と『知識』のあいだの探求：ドロシー・E・スミスのフェミニスト・アプローチ」『現代社会理論研究』14 : 207-217.
- 上野千鶴子 . 1990 . 『家父長制と資本制：マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店
- 吉野ヒロ子 . 1997 . 「テキストのエスノメソドロジー：D.スミス・A.マクホールを中心に」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43 (1) .